

「研修会等名称」

Pearson Kirihara's Teacher's Conference 2010: *New Waves of Learning*

場所： 東洋学園大学（東京都文京区）

期間： 2010年10月11日（月／祝日）

1. 研修の内容

本研修は、外国語としての英語教育（English as a Foreign Language: EFL）分野で多数書籍を発行している出版社である Pearson Longman（ピアソン・ロングマン）の日本法人である 株式会社 ピアソン桐原 が開いたもので、国内外より招かれた英語教育および応用言語学分野で著名な講師が、効果的な英語教育の方法について発表を行った。発表は全部で13あり、4つの部屋に分かれて行われた。各部屋の発表は次のとおりである。

Room 1: Four Skills (11:00 ~ 15:20)

- Marc Helgesen（宮城学院女子大学）“*English Firsthand User's Session*”
- John Wiltshier（宮城学院女子大学）“*Effective Classroom Management, Firsthand*”
- Marcos Benevides（桜美林大学）“*Task-Based Assessment of Oral Proficiency*”

Room 2: E-Learning / Presentation (11:00 ~ 15:20)

- Roger Palmer（甲南大学）“*Blended Learning: a Sea Change in the Ways We Teach and Learn*”
- Anne Braiser（鹿児島大学）“*Insights, Comparisons and Results from an LEI Course Pilot Study*”
- 矢澤 徳夫（長野県上田染谷丘高等学校）“*Teaching English Through English: A Presentation-Based Approach*”

○ Room 3: Testing / Extensive Reading (11:00 ~ 15:20)

- 原田 康也（早稲田大学）“*Use of Versant™ at Waseda University*”
- 早川 幸治（明海大学非常勤）“*Teaching TOEIC® More Effectively*”
- Marc Helgesen（宮城学院女子大学）“*ER; Extensive Reading / Effective Reading*”

Room 4: Teaching Young Learners (11:00 ~ 15:20)

- John Wiltshier（宮城学院女子大学）“*It was fun. So What? Critical Analysis and Selection of Effective Activities*”
- 宮下 いづみ（実践女子大学非常勤、SEG / Eunice English Tutorial）“*Extensive Reading in the Curriculum*”
- 田縁 眞弓（立命館小学校）“*Early Literacy Teaching at Japanese Elementary Schools*”

○ Featured Presentation (15:40 ~ 16:50)

- Jayed Bernstein（Co-founder and Consulting Scientist, Knowledge Technologies, Pearson）“*Current Computer Intelligence in Teaching and Assessment*”

私は Room 3: Testing / Extensive Reading のセッションと Featured Presentation のセッションの発表を聴いた。以下、これらの発表について報告する。

・原田氏 “Use of Versant™ at Waseda University”

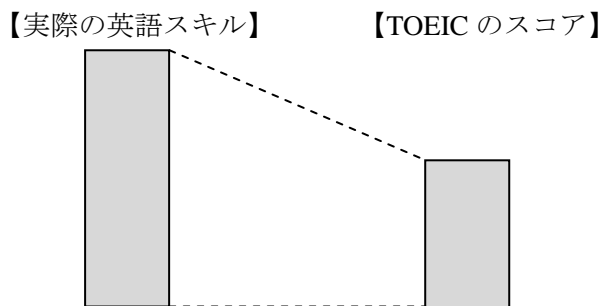
Room 3 の最初の発表である原田氏の発表は、ピアソン・ロングマンが開発した Versant というリスニングおよびスピーキングのテストを、勤務校である早稲田大学法学部の英語の授業で導入した成果、および Versant Test と TOEIC のスコアの関連性、また、学習の初めのうちは上昇する学生の英語力が、ある程度まで行くと止まってしまふ背景にはどのような要因が潜んでいるかに関するものであった。

Versant は電話を使って 15 分間行われる、主にリスニング力とスピーキング力を測るテストとのことであるが、日本の中学生（札幌市）・早稲田大学法学部・イタリアの学生・オランダの学生の Versant のスコアを検証すると、この順番で順にスコアが高くなっていき、中でもオランダの学生のスコアがかなり良いとのことである。原田氏は日本の大学生のリスニング力・スピーキング力が低いのは、最近の学生が恥ずかしがり屋（シャイ）であることも関係しているのかもしれないという意見を述べていた。Versant と TOEIC の関連性については、被験者の数が少なかったため、十分な結果を得ることができていないようであるが、TOEIC にはリスニング・パートが含まれているため、リスニングおよびスピーキングの試験である Versant とオーバーラップしているところがあり、関連性があるのではないかという見解を述べていた。Versant テストが早稲田大学の授業やあるいは TOEIC のスコア向上にどれだけ寄与しているかがもう一つよく分からなかったため、これらがはっきりすればなおよかったと思われる。

・早川氏 “Teaching TOEIC® More Effectively”

早川氏は主に明海大学と桜美林大学オープンカレッジで非常勤講師として TOEIC を教えているとのことであるが、同時に TOEIC の書物やソフトウェアなども多数出版している TOEIC のエキスパートとのことである。

早川氏の分析によると、TOEIC の勉強を始めたばかりの学生の場合、実際の英語のスキルと TOEIC の点数の相関関係は次の図のようになるとのことである。



つまり、実際の英語の力をすべて TOEIC のスコアに表わすことができず、実際の英語力から想定されるスコアより低いスコアになってしまうとのことである。早川氏によると、実際に取得している TOEIC スコアの部分（上記の右の棒）は英語の「知識（knowledge）」に相当する部分であると考えられ、実際の英語スキルと TOEIC スコアのギャップ部分が “Information-processing skills”（情報処理のスキル）や “Test-taking skills”（テストの受け方のスキル）といった、いわゆる TOEIC の「スキル（skill）」と呼ばれるものであるとのことである。早川氏によると、この「スキル」を習得しないと、TOEIC のスコアアップは望めないとのことであった。

そこでこの “information-processing skills”（情報処理のスキル）について、TOEIC のリスニング・パートの中から Part 2, Part 3 および Part 4、リーディング・パートの中から Part 7 について、どのような形でスキルを教えればよいか、その方法を伝授してくださった。

・ Helgesen (ヘルゲセン) 氏 “ER: Extensive Reading / Effective Reading”

ヘルゲセン氏は「多読・速読」にあたる Extensive Reading の研究の第一人者であり、今回は Extensive Reading がいかに優れた読書法であるかについて教えてください、また Extensive Reading の効果的な教授法を伝授してください。ヘルゲセン氏によると、現在、大学等の英語講読の授業でかなりの割合で行われている「精読」(Intensive Reading) は、英語を読む「スキル」を身に付ける読み方であり、Intensive Reading は読むスピードが遅く、どちらかといえばテストを重視した読み方であると主張し、反対に「多読」(Extensive Reading) は速く読むことができ、流暢さ (fluency) を鍛える読み方であり、且つ、楽しさ (pleasure) を重視した読み方であると分析し、非常に効果的な読み方であると主張した。そのうえで Extensive Reading に対して、“Reading a lot of easy, enjoyable books” (簡単に楽しい本をたくさん読むこと) という定義を当てはめた。

ヘルゲセン氏が、勤務校の宮城学院女子大学で行っているペンギン・リーダーズを用いた多読の授業について、そのやり方を紹介し、多読をとおしてどのように学生に英語の読み方を教えているか披露してくれた。また、それらの説明をとおして、なぜ Extensive Reading が効果的な読書法であるか独自の分析を行い、Extensive Reading が理解力を深める読み方であることを、様々な点から検証した。

・ Bernstein (バーンスタイン) 氏 “Current Computer Intelligence in Teaching and Assessment”

ピアソン・ロングマンが開発したリスニングおよびスピーキングの試験である Versant について、どのようなところに主眼を置いて開発がなされたか、詳しく説明してくれた。Versant は以下のパートに分かれているとのことである。

Part A: Reading (予め与えられている文を声に出して読む。)

Part B: Repeat (流れてくる文をそのまま復唱する。)

Part C: Questions (流れてくる質問文に対して返答する。)

Part D: Sentence Builds (流れてくる単語レベルのチャンクをうまく組み合わせて、一つの文にする。)

Part E: Story Retelling (3つの短いストーリーを聞いた後、そのストーリーを30秒で説明する)

Part F: Open Questions (質問が流れるので、そのトピックに基づいて話をする)

それぞれのパートのデモンストレーションも行ってくれた。

2. 研修の成果

今回の研修で、私にとって最も役立ったのがヘルゲセン氏の Extensive Reading (多読・速読) に関する発表であった。実は私も 2009 年度春学期および 2010 年度春学期の「論説英文講読 I」(1 年次必修) で、教科書に基づく Intensive Reading (精読) に加えて、ペンギン・リーダーズ (2009 年度春学期、2010 年度春学期) やオックスフォード・ベリーショートイントロダクション・シリーズ (2010 年度春学期) を用いた Extensive Reading を取り入れている。

2009 年度春学期・2010 年度春学期とも、これら Extensive Reading のタスクに関して学生にレポートを課したが (話のエッセンスを日本語で書き、本の内容に関する感想を英語で書く)、とりわけ 2010 年度春学期については本を読むこと自体に苦痛を感じてしまった学生がおり、レポートの出来がかなりよくない者が数名いた。

ヘルゲセン氏は、学生が楽しんで多読をするためには、教員が効果的なワークシートを作るべきであると提案し、実際にヘルゲセン氏が作成した、学生に課題として与えているワークシートを紹介し、どのような部分に焦点を当てているかについて詳しく説明してください。また、教員が学生を、読書に没頭するように導いていくにはどのようにすればよいか説明してください。これら提案してください。やり方は私にとって「目から鱗が落ちる」やり方であり、確かに英語が得意でない学生に対しては、ただ単にレポートを課すよりもはるかに有益なやり方であると感

じた。愛知大学に着任して以来、効果的な英文講読の教授法を自分なりに追及しつづけているが、この研修で得た知識をうまく活かすことができれば、私のこれまでのやり方で悪かった部分を改善でき、良かった部分を更に伸ばすことができると確信した。今後の「論説英文講読」および来年度以降の新カリキュラムの「Reading」の授業に、今回の研修で得た知見を効果的に活かしていきたいと考えている。

また、早川氏の TOEIC の発表も大いに考えさせられるものであった。私は 2006 年度から 1 年次英語必修科目の「TOEIC I/II」を担当しているが、TOEIC の授業を、「TOEIC だけに偏ることなく、英語そのものの力を上げる教育をする」ことに重点を置くべきか、「TOEIC のスキルを伝授し、TOEIC の点数を上げるための教育をする」ことに重点を置くべきか悩んでおり、結局 前者の「TOEIC の問題をとおして、英語そのものの力を上げる」教え方で授業を行っている。コーディネーターを務めている TOEIC 担当者会議でも、TOEIC 担当者との点に関して意見交換をするのだが、TOEIC 授業担当者の中でも TOEIC テストを解くためのスキルの伝授に主眼を置いている教員もおれば、私のようにスキルの伝授よりもむしろ英語の説明を重視する教員もいる。大学の必修の英語の授業としてどちらがよいかについてはなかなか答えの出ない問題なのかもしれないが、「TOEIC のスコアを上げる」ことを第一義とするのなら、スキルの伝授は必要不可欠であることが、今回の早川氏の発表からよく分かった。

11N カリキュラムでは、「TOEIC」の授業が 2 年次秋学期に配置されることになり、これまでより、より就職を意識している段階で TOEIC の授業を行うことになる。よって、今まで以上に「TOEIC の点数を上げる」ことを目指す授業をしなければならぬと思うが、早川氏のグラフでも示されているが、「スキル」の部分だけではなく、「英語力」も TOEIC のスコアには必要不可欠であることは明らかである。スキルの伝授も授業に取り入れつつ、同時に英語力も上げることができると、効果的な TOEIC 教授法を考えていきたいと思っている。

3. 授業等への研修成果の反映状況

私は本年度秋学期の「論説英文講読 II」（1 年次必修）では、春学期同様、教科書を中心とした Intensive Reading に加えて、Extensive Reading も取り入れている。ただし春学期とは異なり、ペンギン・リーダーズなどの書物は用いずに、私が用意したプリントを用いている。ぜひこの Extensive Reading の部分に、ヘルゲセン氏の発表で得た知見を取り入れていきたいと考えている。また、「英語演習」（3, 4 年次選択）の授業でも Reading のタスクを取り入れているが、この授業の受講生は英語が好きな学生が多いことから、本研修で得た知見をより効果的に活かすことができると思われる。従って、ぜひ「英語演習」でも本研修で得た教授法を試してみたいと考えている。

また、「TOEIC II」（1 年次必修）の授業でも、TOEIC のスキルを伝授するという側面をうまく取り入れていきたいと考えている。現在担当しているクラスが、英語が苦手な部類に入る 16 クラスであることから、スキルの伝授だけではなく、英語力そのものの底上げも必要である。どのようにすれば両者をうまく絡めることができるか、試行錯誤を重ねていきたいと考えている。

学部長	FD委員長	FD委員会	企画・広報課長	係